

馬耕

文・イラスト・写真提供 横山紀子（長野県伊那市高遠町・うまや七福）

馬に犁を引かせて田畑を耕起すること。昨今はトラクタにすっかり取って代わられたが、明治から昭和30年代ごろまでは、田畑の耕起は人馬一体作業だった。



馬とやる作業

収穫後の秋にやる「荒起こし」と春の「田起こし」、「踏ませ」、「代かき×2」。踏ませは、田んぼに水を入れたあと、土が水面から出ているところなどを馬に歩かせて踏ませること。土をほぐして地面の凹凸を少なくする。耕起（荒起こしと田起こし）が一番難しい



「ビ
ンゴ！ 行くぞ」「うまいうまい！」
「ビンゴくん、がんばれ！」

お馬のビンゴ、鼻取りの父ちゃんヨッサン（夫・晴樹）、娘のいろ葉を背負いながらしんどり（犁持ち）をする母ちゃんのりたけ（筆者）。春、横山家の田んぼ作業は、家族3人＋馬1頭で耕起するところから始まります。1反ほどでも、お昼ご飯を挟んで丸一日はかかる作業です。

調教で信頼関係を築く

私たちが暮らす高遠は、古くから木曾馬の産地で、昭和40年代まで馬耕が残っていた地域です。かつて海外を放浪して、各地で働く馬を目にしていたヨッサンは、「いつの日か日本でも働く馬のいる農村の原風景を取り戻したいなあ！」と、高遠に移住。2011年ごろから、木曾馬やポニーでも馬耕を試みましたが、なかなかうまくいきませんでした。

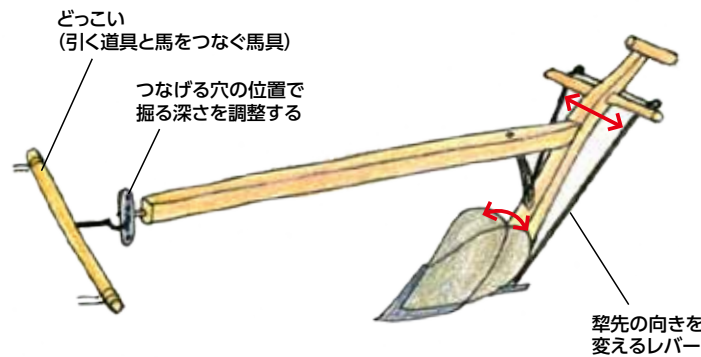
転機になったのはビンゴとの出会いです。14年の冬、ヨッサンが岩手の馬方・岩間敬さんに弟子入りして馬搬ははんの修業をしていたときに「まずは仕事のできる馬で始めたほうがいいよ」と紹介してもらったのがビンゴ。15年の春から横山家のお馬さんとなりました。

もちろん、ビンゴでもすぐにできるようなったわけではありません。馬耕や馬搬をする「働く馬」になるには、人間との信頼関係を築いて、人に素直に従うようにする「調教」が必要なのです。ビンゴは岩間さんに少し調教してもらっていましたが、私たちが昔



耕起の様子

犁の先を15～30cm土に差し込んで掘り起こす。犁を傾けた側に土が盛られていく。犁先が前傾して深く入りすぎないように、逆に上滑りもしないように、一定の角度を保って歩くのがポイント。馬とスピードが合わないと難しい



双用犁 (そうようり)

横山家で耕起に使う犁は明治33年に長野県で開発された「双用犁(松山犁)」。手元のレバーで犁先を左右に変えられ、右側にも左側にも土を起こすことができるので、往復で作業できる。現代のリバーシブルプラウだ

馬耕をやっていた地元のおじいちゃんに習い、丸太を引つ張ったり、田んぼで往復して歩いたりといった練習(調教)をすることで、少しずつ馬耕への道が開けてきました。

自然にやさしく、しかも楽しい

横山家では、1反半の田んぼの秋耕起、春耕起と代かきをすべて馬耕で行なっています。ふつう馬耕は、馬を引く人(鼻取り)と犁を操作する人(しんどり)の2人で行ないますが、人手が足りなかった昔はなんと鼻取りなしで1人でやることもあったそうです。名人技！体験会や作業に呼んでもらい、お仕事で馬耕をすることもあります。昨年、馬耕体験会で子供たちと代かきをしたときには、水上スキーのように馬に引かれて子供たちは大興奮！気が付いたら田んぼがトロトロになっていて、「遊びながら作業が進むなんて最高！」と、みんな大喜びでした。

また、昔のテラーにつける乗用の代かき機を、馬が引けるように改造してもらったこともあります。それをビンゴが引くと、馬車に乗っているみたいに優雅に代かきできます(次ページ写真)。「道具によっていろいろ楽しみ方を変えることができる！」と大発見で、またまた大喜びでした。

馬と人と二人三脚で行なう馬耕。体力と時間がかかるけど、いろんな工夫ができる面白さがあります。機械音がない田んぼでは、たくさんのおしゃべりしながら楽しく作業が進められるし、馬と働くと疲れも感じま